ホルモンを分泌する下垂体

脳腫瘍（下）

科の枠を越えて診療する

健康 Health

前回（4月2日付）に引き続き「脳腫瘍」について解説します。今回は、脳腫瘍の中でも、代表的な良性疾患の一つである「下垂体腫瘍」について、鹿児島大学病院「下垂体疾患センター」の藤尾信吾センター長に聞きました。

藤尾 信吾 センター長

身体の影響は多方面に及ぶ

頭蓋骨の中には「トルコ鞍」と呼ばれる〝くぼみ〟があり、ここにはたくさんのホルモンを分泌する「下垂体」という器官があります。

この下垂体とその周辺には下垂体腺腫、頭蓋咽頭腫、胚細胞腫瘍、髄膜腫などさまざまな腫瘍が発生します。

下垂体のすぐそばには「視神経」がありますので、下垂体の腫瘍が大きくなって、目の神経を圧迫すると視力が落ちたり視野が欠けたりします。

また、下垂体ホルモンが出すぎたり、足りなくなったりすることで、身体への影響も多方面に及びます。

「気付きの病気」とも呼ばれる

通常、下垂体の病気は、なかなか表に現れにくく、気付いたら病気が進行していることが多いです。

反対に、比較的軽いうちに症状に気付くと簡単に診断につながることも多く、このため「気付きの病気」とも呼ばれています。

主な症状は①眼科の病気では説明がつかない視力低下や視野の異常（腫瘍の視神経への圧迫）②手足が大きくなる、足が大きくなって靴が入らなくなる（成長ホルモンを作る下垂体腺腫）③月経が不規則、妊娠できない（プロラクチンを作る下垂体腺腫）④薄い尿がたくさん出る（尿濃縮ホルモンの不足）⑤ひどく疲れやすく、意欲が湧かない（副腎ホルモンや甲状腺ホルモンの不足）――などになります。

このような症状に気付いたら、下垂体の病気でないか、かかりつけ医に相談してください。

下垂体腫瘍は、頭部の磁気共鳴画像装置（MRI）検査と下垂体ホルモン値を測定することで診断できます。

中には正常と異常の境目のこともありますので、下垂体専門医による検査と判断が必要なものもあります。

疾患名	過剰分泌されるホルモン	症状
成長ホルモン産生下垂体腺腫（先端巨大症）	成長ホルモン	顔つきの変化、指の腫脹、高血圧、糖尿病など
クッシング病	副腎皮質刺激ホルモン	肥満、ニキビ、高血圧、多毛など
プロラクチン産生下垂体腺腫	プロラクチン	月経不順、乳汁分泌、不妊など
甲状腺刺激ホルモン産生下垂体腺腫	甲状腺刺激ホルモン	動悸、発汗、体重減少など

（表1）機能性下垂体腺腫の種類と主な症状

負担の少ない経鼻手術が普及

下垂体腫瘍は、脳の深いところにあることから、以前は手術が最も難しい腫瘍の一つでした。

しかし、40年ほど前に、上くちびるの裏から蝶形骨洞と呼ばれる頭蓋骨内の空洞を経由してトルコ鞍に到達する「経蝶形骨洞手術」が導入され、患者さんへの負担を大きく減らすことができるようになりました。

その後、経蝶形骨洞手術は年々進歩し、現在では下垂体腫瘍の約9割が経蝶形骨洞手術で摘出されています。

最近では内視鏡を使用した経鼻手術が普及し、より広く明るい視野で手術を行うことができるようになりました。

鼻の中のような狭い空間では、手術中、どこを操作しているのか、位置の把握が難しくなることがあります。ですが、そのような状況でも、手術用ナビゲーションシステムを利用することで、的確に位置情報を表示できます。

特に、近年導入された「磁場式トラッキング法」では、他の機器による干渉がなく、制限された術野内でも、自由度の高い器具操作が可能になりました。

このような最新の手術支援機器を活用することで、経蝶形骨洞手術の安全性、確実性は飛躍的に向上しています。

当センターでは、8割から9割の患者さんが、1回の経鼻手術で治療が済んでいます。

薬物治療・ホルモン補充療法

下垂体腫瘍の中で、ホルモンが過剰に分泌される疾患を「機能性下垂体腺腫」といいます（表1）。

機能性下垂体腺腫の一つである「成長ホルモン産生下垂体腺腫」は、手術が治療の第1選択ですが、手術での根治が難しい場合には薬での治療が必要となります。

近年、先端巨大症に対する治療薬の進歩は目覚ましく、2016年には、新しい注射薬が使用できるようになりました。今後、その他の機能性下垂体腺腫への応用や、経口薬の開発も期待されています。また、下垂体からは人間が健康に生活するために欠かせない大切なホルモンが多数分泌されていますが、ホルモンバランスが崩れると、成長障害、肥満、生活習慣病、月経不順、不妊などを引き起こします。

下垂体腫瘍では、このホルモンバランスが障害されやすく、ホルモンの分泌障害が明らかであれば、適切なホルモンをきちんと補う必要があります。

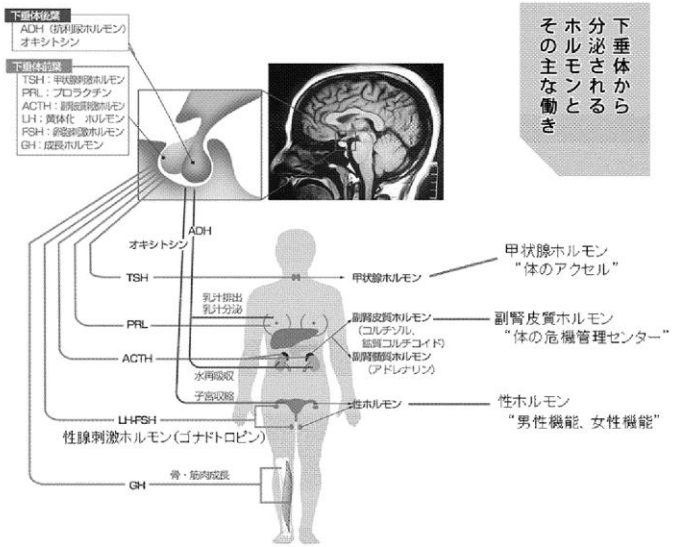
必要とされる補充量は個人差があり、年齢や性別によっても大きく異なります。そのため、診断と治療には脳神経外科だけでなく、内科や小児科、産婦人科、泌尿器科などとの連携も必要となります。

例えば、下垂体から分泌されるホルモンの一つに「成長ホルモン」があります。骨や筋肉の成長を促すこのホルモンは、思春期以降、加齢とともに減少していきますが、生涯にわたり、その分泌は持続し、私たちの健康を維持しています。

近年、成長ホルモンの分泌が低下すると、生活の質（QOL）が低下し、心血管障害や肝障害を引き起こすことが明らかとなってきました。

成長ホルモンは、下垂体腫瘍だけでなく、頭部への放射線治療、頭部外傷、くも膜下出血などでも分泌が障害されます。

これらの疾患の既往がある患者さんの中で、肥満、皮膚の乾燥、無気力などの症状があれば、成長ホルモンの分泌に異常がないかどうか、専門医に相談されることをお勧めします。成長ホルモンの補充でそれらの症状が改善することがあります。



2017年4月9日付
聖教新聞7面掲載